

幼稚園と小学校に求められる連携・接続とは何か？

～「勉強って何？」幼小接続実践 7年間の記録から～

Discussing the Influence of the Transition between Kindergarten and Primary School
- “What Does Study Mean?” A Case of Having Exchange for Seven years with a Primary School-

鈴木 静*

Shizuka SUZUKI

首藤 敏元**

Toshimoto SHUTO

【概要】近年、「幼小接続」問題が教育課題として注目されている。平成29年告知の新幼稚園指導要領・小学校学習指導要領内でも、円滑な接続に関する内容が盛り込まれている。そこで本研究では、プロジェクトを基軸とした小学校と幼稚園の交流活動や日々の保育活動が円滑な幼小接続に寄与しているか、参与観察・保護者対象の質問紙調査・7年間の活動記録をもとに考究した。その結果、小学校教育を先取りするのではなく、子ども達の特性を捉え、幼児期の教育を充実させる為の教育方法をとることが、円滑な幼小接続に寄与する為に必要なであり、その手法としてプロジェクトを基軸とした交流活動は有効であることが分かった。

【キーワード】幼小接続、実践研究、プロジェクト活動、カリキュラム

1. 研究背景

近年日本において幼小接続に関する問題はとて注目されている教育課題の一つである。(金谷, 2013)

このような現状からA幼稚園は、2011年より小学校進学への不安を抱える親への支援の一環として、幼小接続に関する活動をスタートした。その際、現状を知る為A園卒園児保護者数人を対象に単なる自由記述アンケートを行った。アンケート内容は、1. 入学式や授業参観での子どもの様子 2. 幼稚園で身につけていた良かったスキル・身につけて欲しかったスキル 3. 現在の子どもの様子の3項目だ。その結果特に目立ったのが、保育園や他の幼稚園の子ども達の「座ってられない」「先生の話をお聞きせず大声でお喋りをする」「落ち着きがない」などの様子や、「保護者自身が授業中に子どもに話しかけている」「一緒に連れてきた子ども(弟/妹)が教室を歩き回り授業を妨害しているにも関わらず注意しない」などの記述だった。

各公立小学校には、公立・私立の幼稚園や保育園、認定こども園と様々なタイプの就学前教育を受けてきた子ども達が一同集結する。その為、生活習慣の基礎をやり直し足並みを揃えるに約1年待たなければならないことに、保護者ももどかしさやカルチャーショックを受けているようである。

このように、日本における幼小接続は就学前という自由選択の教育から、必ず受けなくてはならない義務教育という「統一された教育」へ移行する状態である。よって、急激な環境の変化に子どもや保護者が戸惑うのは

当然であり、新しい環境に順応するための準備・情報・時間が必要であることがわかる。

それでは、このような現状に対し小学校はどのように対応しているのだろうか。

2009年に文科省(2010)が都道府県・市町村教育委員会に対し行った調査によると、100%の都道府県・99%の市町村が幼小接続に関して「重要」と認識しているにも関わらず、77%の都道府県・80%の市町村が幼小接続の取り組みが行われていないと回答している。また、その理由として、「接続関係を具体的にすることができない」が52%、「幼小の教育の違いについて十分理解・意識していない」が34%、「接続した教育課程の編成に積極的ではない」が23%となっている。この結果から、就学前教育も学校教育も互いの教育に関心を示さず教育を行っている傾向が読み取れる。そして、このような互いに「無関心」な状態によって、本来ならば子どもの発達は連続しているはずなのに、就学前教育において積み上げてきた教育・学びを、学校教育に切り替わったとたんにあたかも白紙の状態から指導しようとする傾向が懸念される。

また、2018年度からスタートした新幼稚園指導要領総則第3章5-(2)において、「小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、『幼児期の終わりまでに育てたい姿』を共有するなど連携を図り、幼児教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。」とあることから、現状改善の為に幼児教育と小学校教育の

* 学校法人東山学園 認定こども園 Kids Play Park 坂戸あずま幼稚園

** 埼玉大学教育学部 乳幼児教育講座

連携の重要性がうかがえる。

以上、このような背景から、急激な教育環境の変化や連携という問題に対し、実際に就学前教育から学校教育へ移行する子どもや保護者の不安や戸惑いを軽減する手立てとして一体何ができるか、教育現場だからこそできる「実践」をもとに、効果的な教育手法を本研究において検討した。

2. 研究目的と方法

A 幼稚園では、2011 年より幼小接続に関する活動として、園から徒歩 10 分以内の S 小学校との交流会をスタートさせた。A 園では、プロジェクト活動を基軸とした保育を展開しておりこの交流活動もプロジェクト活動の一つとして行っている。

そこで本研究では、2つの研究目的を置く。1つが、プロジェクト活動が円滑な幼小接続に寄与しているかどうかを実践事例や保護者対象の質問紙調査をもとに検討する。2つ目が、幼児・児童両者にとって、彼らの暮らしや学びをより豊かにする円滑な接続の為のデザインの検討である。

この目的に沿って円滑な幼小接続・連携を考究するには、子ども達を取り巻く環境や日々の生活、つまり、教育実践を考察することが重要となる。よって、研究方法としては、2012 年から 2017 年度の S 小学校と A 幼稚園の交流活動の記録や、日々の保育活動が円滑な幼小接続に寄与しているのか参与観察を用い考察していく。

また、質問紙調査を通して保護者の観点から、プロジェクト活動が円滑な幼小接続に寄与しているかを検証していく。

3. 「プロジェクト活動」としての学校間交流

3-1 活動方法を定めるきっかけ

先に紹介したように、A 幼稚園では教科を超えた「学び」を展開するために、A 幼稚園独自の「プロジェクト活動」を基盤とした保育を行っている。この「プロジェクト活動」はある特定のトピックスについて「こだわりを持って探求する」ことを意味する。そして、学年や年齢に関係なく、子どもが仲間との協調や教師との相談を通して、何を学ぶか自分達で決断し、選択できるカリキュラムである。こうした活動から、子ども達の知力に対する自信を増し、もっと学びたいという性質の強化が期待できると考えている。

そこで、S 小学校校長に事前に A 園へ保育見学に来てもらい、その後の協議の結果本園と S 小学校との交流活動ではプロジェクト活動を取り入れた内容とする事になった。

3-2 交流活動の概要と目的

本活動対象児は、A 幼稚園 5 歳児（4 クラス）と S 小学校 5 年生（4 クラス）。なぜ 5 年生かというと、翌年

A 園の子ども達が入学する時に、彼らが最上級生として新入生を迎えるからだ。回数は、毎年 1 回～2 回。

次に子ども達にとっての活動目的だ。折角の交流会なので毎年事前に A 園から質問のお手紙を小学生の子ども達に出している。内容は「なんで勉強するのですか?」「勉強ってどんなことをするのですか?」など小学校生活について具体的な質問を出している。そこで、5 歳児はこの質問の答え探し、5 年生はこの質問に答えることが交流活動目的となっている。

3-3 実際の交流内容

(1) 事前打ち合わせ

毎年 6 月頃、小学校の教員と A 園にて事前打ち合わせを行っている。その際に、小学校側が交流会に対する学習の「ねらい」をもとに作成した指導計画書を提出し、それをもとに A 園の希望や子どもの様子をすり合わせ、交流会の活動内容や計画を立てる。

また、打ち合わせ場所が A 園ということで、中々立ち入ることのない保育の現場に小学校教員も興味津々の様子。教室に展示されている子ども達の作品を見ては、「ここまでできるのかあ。」と、幼児達の現在のポテンシャルを実際の作品を通して理解・確認することで、教師自身も「幼児＝赤ちゃん」ではないことに気づき、交流会での対応や接続後のクラス運営へ活かすことができているようである。

(2) 実際の様子

交流会当日は、全体会にて互いに踊りや組体操、歌などのパフォーマンスを見せ合い、パートナーとなるクラスごとに各教室へ移動する。

移動後はクラスごとに考えた質問に対する答えの活動が展開される。その活動内容は、登校から下校までの小学校の 1 日の流れを劇にして紹介したり、各教科授業をブースに分けて教えたりしている。例えば、国語は、漢字やカタカナを実際に授業で教師が使用している教材を使って教える。また、算数では、足し算や引き算を、理科では電池で動くミニカーを動かしたり、書道なども行う。さらに、ランドセルに教科書などを詰め背負ってみる体験や、教室の掃除体験では廊下の雑巾がけ体験なども行っている。この他にも、音楽や体育、自由時間の説明や図画工作の授業など毎年様々な活動を用意してくれている。これら活動の準備や実際に使用しているプリント、ご褒美のメダルや折り紙などは小学生が自分達の一年生だった頃を思い出し、「具体的で分かりやすい授業」「楽しい授業」を目指し企画し、用意してくれている。その為気づけば、小さな先生が教室にたくさんいる。



【図1 教室へ出発！】



【図2 質問のお手紙】



【図9 ランドセルコーナー】



【図3 教室にて】



【図10 実際の登校スタイルに嬉しそうな園児】



【図4 理科コーナー】



【図5 書道コーナー】



【図6 音楽コーナー】



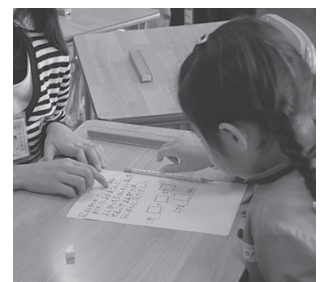
【図7 体育コーナー】



【図11 引き出しコーナー】



【図8 給食コーナー】



【図12-13 算数コーナー】

3-4 小学校の教員たちからの感想

この一連の活動の様子に一番驚いていたのが、S小学校の教員達である。「たった一つ二つの疑問から子どもたちは多くの学びを創造し、課題を達成していきました。何より、子ども達が活動に取り組む様子が他の教科授業とは違い、生き生きとしていたことに驚いた。」といった感想を後日もらった。また、市内の他校に異動した本活動経験のある教師が、その後も継続して幼少接続のための交流活動を行っているという報告も受けている。

更に2012年12月には、初年度の活動を踏まえ、S小学校校長とA幼稚園が共同企画として就学を控えた園児保護者対象に入学準備のための講演会を行った。



【図14 S小学校校長（当時）による講演の様子】



【図15 就学前に身に付けておきたいスキル】

3-5 保護者への質問紙調査の考察

2016年5月、2017年2月と2回の質問紙調査を行った。対象は、2016年が卒園児の保護者、2017年は卒園を1ヶ月後に控えた5歳児の保護者。調査目的は、2016年が、1.A園でのプロジェクト活動をベースとした保育がどのように小学校での学びに影響しているか。2.子ども達の幼小接続の現状を把握する為、2017年は、2016年に交流会を体験した園児の保護者を対象とすることで、交流活動への評価と活動後の変化を調査することを目的とした。またこれに付随して、子ども・保護者の幼

小接続への不安や要望を質問することで、学校と就学前教育にとって円滑な接続ではなく、幼小接続の主役である子どもや保護者に寄り添った連携へとなるよう、今後の活動への参考として情報収集を行った。

質問紙は、2016年が100家庭、2017年は104家庭に配布した。回収率は、2016年23%、2017年91%となった。2016年の回収率が大幅に下回った理由としては、卒園後の「同窓会」にて配布した為、回収が各自郵送であったことが原因だと推測される。

2016年の質問内容は、以下の通りである。

- ①小学校でのお子様の様子を伺うアンケートに今後ご協力いただけますか。
 - ②何歳でA園へ入園したか。
 - ③A幼稚園に入ってからのお子様の様子はいかがでしたか。
 - ④A幼稚園では、主にプロジェクト活動を行っています。ご家庭でご協力いただいたことも多くあったかと思いますが、印象に残っている活動がございましたら教えてください。
 - ⑤そのプロジェクト活動が印象に残っている理由をお聞かせ下さい。
 - ⑥入学式、初めての授業参観でのお子様やクラスの様子はいかがでしたか。
 - ⑦お子様がA幼稚園で学んだことで、小学校に入ってから「良かったな」「こんなことができるんだ」と感じたことは何ですか？また、入学にあたり園生活で身につけて欲しかったことは何ですか。
 - ⑧小学校生活と園生活での違いやお子様の近況などを教えてください。
 - ⑨A幼稚園への満足度を教えてください。そしてその理由も教えてください。
 - ⑩通学している小学校の学区
- これらの項目のうちプロジェクトに関する質問は④
- ⑤、幼小接続に関する質問は⑥⑦⑧となっている。

また2017年は、以下の質問項目とした。

- ①小学校との交流活動は必要だと思うか。
- ②本交流会を終え、やってよかったと思うか。
- ③本交流会を終え、小学校入学に向け子どもに変化はあったか/具体的な変化。
- ④本交流でどのような活動が行われたか知っているか/どのようにして知ったか。
- ⑤小学生・中学生の兄・姉はいるか。
- ⑥⑤の子どもは以前A幼稚園とS小学校の交流会に参加経験があるか。
- ⑦⑥の経験を振り返った感想。
- ⑧小学校入学への不安はあるか。
子どもに関して・保護者にとって
- ⑨小学校入学にあたり（学用品購入以外で）何か準備していることはあるか。
- ⑩A幼稚園での活動や保育の中で、小学校入学に向けて良いと思える活動はあったか。
- ⑪幼稚園時代に「やっておけばよかった」と思う事

はあるか。

質問構成としては率直な意見や感想を得たかった為、2回とも自由記述式を採用した。

調査結果を以下に示す。まずは、目的①の「A園での学びが現在どのように小学校生活に影響しているか」。これは、A園が「プロジェクト活動」と呼ばれるプロジェクト型の保育を展開していることから、卒園後の子ども達にこの教育手法がどう影響しているのかを知ること、円滑な幼小接続への影響も検討できると考え質問した。2016年実施の調査結果では、あいさつ・マナー・身の回りの管理等の「基本的生活習慣」、活動への「意欲・集中力」、「プレゼン能力」、「字の読み書き」の4項目の影響を抽出。その結果、基本的生活習慣は全体の約74%、意欲・集中力は約35%、プレゼン能力が30%、文字のみ書きは約26%となり、この他にプロジェクト活動において必ず行う記録や観察の経験から、何かを「発見」しようとする観察力や記録力が身についたなどの回答が、文字の読み書きや意欲・集中力に付随した形で回答に組み込まれていた。(本結果は自由記述のため複数回答)

次に、目的③の「交流活動への評価と活動後の変化」だ。まず、「本交流活動への評価」だが、交流を必要と感じている保護者が82.1%、どちらでもないが15.8%、必要ないが1%、活動をやってよかったかどうかの質問では、とてもよかったが36.8%、よかったが57.9%と、全体の約95%の保護者が本交流活動に対しポジティブな評価をしている結果となった。

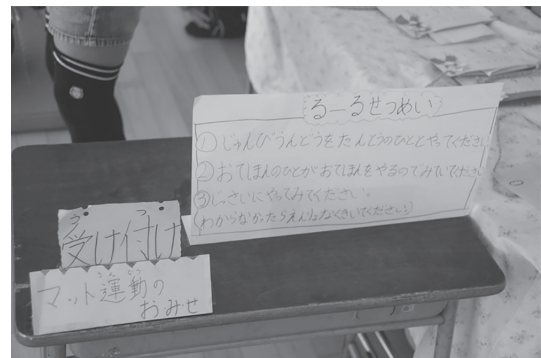
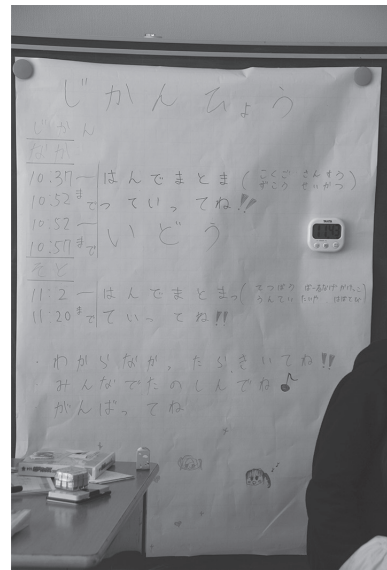
最後に、「具体的な子どもの変化」だ。変化ありと答えた保護者が54.7%、変化なしが44.2%となり、ほぼ半々といった結果となった。具体的な変化としては、「小学生になることを楽しみにするようになった」「小学生のお兄さん・お姉さんと接して改めて『小学生になるんだな』と実感していた」「小学生に優しく接してもらえて不安が取り除けた様子だ」「小学校生活がイメージしやすくなった」「ひらがなを練習するようになった」「家での遊びの中に『勉強ごっこ』が増えた」「漢字に興味を持ち始めた」「『小学校に行きたい』とよく話すようになった」「数字や言葉を学ぶことに意欲的になった」「早寝早起き・身の回りのことは自分でできるようになった」「家の手伝いを率先してするようになった」「一人で寝れるようになった」といった、ポジティブな例が挙げられていた。また、「小学校の机や椅子などに触れ、学校がどういうところか分かったようで、小学生になることへの不安が増した様子」といったネガティブな意見が1件だけあった。

「活動への興味関心と家庭へのフィードバック」では82.1%の保護者が活動内容を把握していると回答しており、ほとんどの家庭にフィードバックができていた結果となった。これにより、保護者が本交流活動内容を理解した上で「具体的な子どもの変化」を感じていると考えられ、この変化が本交流活動によるものであることの裏付けとなった。

4. 考察

実は、他の小学校の教員や校長先生にA幼稚園の「プロジェクト活動」を紹介すると、「教科に当てはまらない」「うちでは無理」「本当に子ども達がやったの？先生がやったんじゃないの？」など否定的な感想を多く受ける。この傾向から、本交流にて「プロジェクト活動」を取り入れる際には、校長には事前に主旨を伝えたが、5年生担当の教員達には「プロジェクト活動」について具体的な話はしていない。

しかし、国語なら国語、算数なら算数と教科に特化するのではなく、「勉強」「学校」という広範囲を対象とすることで、様々な教科や分野へと学びの場を広げることができている。また、国語や算数といった教科が「できる・できない」にフォーカスするのではなく、「勉強」「学校」と広範囲を対象とすることで、その教科がどういったものでどう学ぶのかなど各教科が持つ「目的」「意味」「方法」とさらに深いところまで考えることができている。そして、「分りやすい授業」に徹底してこだわり、今まで自分が受けてきた授業で困ったことなどを参考に改善点を模索したこの一連の活動は、子ども主導で行われる子ども同士での話し合いをもとに展開されている。



【図 16-17 幼児に分かりやすいよう準備されている】

教員達はアドバイスなどのサポートのみ行った。その結果本交流は、「徹底したこだわりある学び」「意欲的な取り組み」「仲間との協調の中で展開」という「プロジェクト活動」のポイントをしっかりと捉えた活動となっている。

更に幼児達は本交流の経験から、今度は翌年5歳児クラスに進級する4歳児へ今後の園生活を伝えている。その方法は様々だが、基本は「紙芝居」形式で発表している。このように、何をしてきたかの「報告」ではなく、自らが体験した経験自体をフィードバックするという「反復」がなされており、本活動での経験を活かして新たな学びへと発展していることがわかる。そして、このような「反復の学び」こそ、「プロジェクト活動」の醍醐味なのだ。

2011年の初回の成果から、2017年の交流会まで休むことなく毎年この「プロジェクト活動」をベースとした学校間交流が続いた。A園園児にとっては約半年後の新しい学校生活の準備として、小学生にとっては日々の学びを見直し4月から新しい小さな後輩を迎える準備として重要な交流活動となっている。この結果は、秋田(2002)が述べる、「幼小連携のための連携でなく、園児に取って暮らしや遊びを豊かにするため、小学生にとって学びを深めるための必然性の中にある連携とその研究」に値する実践事例と評価できると考える。

5. まとめと結論

このように、S小学校とA幼稚園の交流活動の参与観察結果から、「プロジェクト活動」を基軸とした本交流活動において、幼児・児童両者から、①明確な目的・目標を持った学び、②自然と深く考え工夫する姿、③目的・目標達成に向け意欲・関心を持って粘り強く挑戦する姿、を発見することができた。よって本活動が、彼らの暮らしや学びをより豊かにするための円滑な接続へ有効なプログラムとなっており、互いの学びを深めるための「必然性の中にある連携とその研究」に値する実践事例と評価できる。

また、保護者への質問紙調査結果から、在園中の保育によって、観察や記録(文字)・プレゼンテーション力・学びへの意欲・理解力などが身につく、小学校進学後役立っているという回答を得た。この結果に鑑み、プロジェクト活動には主体的で対話的な学びがあり、それが教科教育を基盤とする小学校教育の学びを支える力となると考えられる。

そして、「プロジェクト活動」を基盤としたS小学校とA幼稚園の交流活動は、保護者や子どもたちにとって就学前準備としてポジティブな変化をもたらす有効なプログラムであり、就学前の子どもにとって必要な活動の一つであると評価できる。

よって、小学校教育を真似したり先取りするのではなく、子ども達の特性を捉え、幼児教育を充実させる

ための教育方法をとることが円滑な幼小接続に寄与するために必要である。そして、その手法として「プロジェクト活動」は有効であると考えられる。

【文献】

- 秋田喜代美, 東京都中央区立有馬幼稚園・小学校(2002), 「幼小連携のカリキュラム作りと実践事例-子どもが会う教師がつなげる幼小連携3年の成果」, 小学館.
- 藤井穂高, 福元真奈美, 渡邊健治(2010), 小1プロブレム研究推進プロジェクト報告書第1章, 東京学芸大学「小1プロブレム」研究推進プロジェクト.
- 金谷京子(2013), 第6章保育の中での人間関係・社会性発達の課題と支援(2)-保・幼・小学校連携・移行支援, 長崎勤・森正樹・高橋千枝, 「シリーズ:発達支援のユニバーサルデザイン第1巻 社会性発達支援のユニバーサルデザイン」, 金子書房.
- 木村吉彦 監修, 茅野市教育委員会 編(2016), 「長野県茅野市発 育ちと学びをつなぐ『幼保小連携教育』の挑戦 実践接続器カリキュラム」, ぎょうせい.
- 文部科学省, 「幼稚園教育指導要領」, 文部科学省, 平成29年告知.
- 文部科学省, 「小学校学習指導要領」, 文部科学省, 平成29年告知.
- 文部科学省(2010), 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究」, 調査研究協力者会議報告書.

【謝辞】

本研究において、参与観察等にご協力いただきましたS小学校の先生はじめ児童の皆様には多くの温かいご協力をいただきました。また、質問紙調査にご協力いただいたA幼稚園保護者の皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。

Discussing the Influence of the Transition between Kindergarten and Primary School

— “What Dose Study Mean?” A Case of Having Exchange for
Seven years with a Primary School —

Shizuka SUZUKI

Certified Children Center Kids Play Park, Sakado Azuma Kindergarten

Toshimoto SHUTO

Department of Early Childhood Education and Care, Faculty of Education, Saitama University

【Summary】

The new educational guidelines announced in 2017 contain directives regarding the seamless transition of children from nursery to primary education. The educational objectives of this progression have increasingly attracted scholarly attention in recent years. This study examined whether project-based exchange exercises or common daily childcare activities between nursery and primary educational institutions could contribute to an effortless changeover between the two phases of learning. The author's personal experience in the field of education over the course of 7 years, participant observation, and questionnaire surveys administered to parents were employed to achieve the stated objective. The results of the study demonstrate that rather than imparting primary school education in advance to nursery children, an educational method that empathises with children's personalities and enhances early childhood education is required for the smooth transition of a child from nursery to primary school. Exchange activities based on projects were found to be an effective means of achieving this development objective.

【Key Words】 transition to school, practical research, project approach, curriculum

*Journal of Integrated Center for Clinical and Educational Practice (Faculty of Education, Saitama University),
No. 17, 2019, 63-69.*